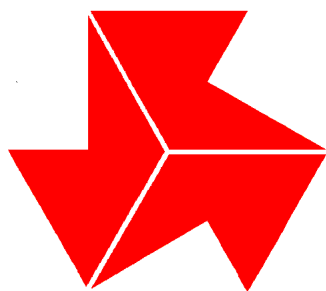


平成28年度  
第10回石川県高等学校体育連盟研究大会

# 研究紀要



主催 石川県高等学校体育連盟

# 平成28年度 第10回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

- 1 目的 石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主催 石川県高等学校体育連盟
- 3 日時 平成28年11月29日（火） 14：00～16：00
- 4 会場 石川県青少年総合研修センター  
金沢市常盤町212-1 TEL 076-252-0666
- 5 参加対象 石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
- 6 研究主題 羽ばたけ世界へ！未来のアスリートたち
- 7 内容 研究発表

「どん底からのチーム作り」

発表者 テニス専門部  
金沢大学附属高等学校 前田 健志 教諭

「少林寺拳法の競技力向上に向けて」

発表者 少林寺拳法専門部  
金沢高等学校 岩野 将士 教諭

「ソフトボール競技の発展と競技力の向上」

発表者 ソフトボール専門部  
寺井高等学校 奥村 誠 教諭

「柔道競技 女子の強化について」

～柔道の歴史と女子柔道の歩みから～

発表者 柔道専門部  
金沢学院高等学校 西村 裕樹 教諭

8 日程

13:30	14:00~	14:10~	15:40~	15:55~
受付	開会式	研究質疑 発表 応答	指導 助言	閉会式

## 1 赴任まで附属高校の部活動

2010年、私が本校に赴任し女子テニス部の顧問を拝命したころ、部活動と呼べるものは1つもなかった。活動は週3日程度で、参加したい者だけが集まり、少し体を動かす程度のサークル(同好会)のようなものしかなかった。テニス部も例外ではない。テニスコートにはカップラーメンなどのゴミが散乱し、制服・ブーツでラリーをしている部員もいれば、砂に絵を書いて話しているだけの部員も少なくなかった。たまにテニスが強いつ生徒が入ってくるが、チームとしては非常に弱小。スポーツ推薦などもなく、もちろんスカウトなどはしない。このような状況なので部活動がしたくて附属高校に来る生徒はまずいない。学校の方針としても、生徒がやりたいようにやらせておくという自由放任主義で、部活動に顔を出している顧問はほとんどいなかった。県外遠征や合宿などを企画しても「なぜそんなことをする必要があるのか?」「本校は部活動を頑張る学校ではない」と言われ一蹴されることもしばしばあった。

言わずもがな部活動は教育活動の一環であり、人格形成に多大な影響を与えるものである。他者と支えあい、様々なものに出会い、感謝し、目標に向かって精進する。そんな教育観が全く通用しない場所、それが附属高校であった。そういう意味で本当に「ゼロ」からのスタートであった。

## 2 改革

### (1) ミーティングでの意識改革、自分たちの特性を活かした練習

本校の校風は自由(放任)であり、上から目線や強制、管理ということを極度に嫌う生徒が多い。しかし、自立・自律しているわけではなく、幼稚でわがままな言動も多々ある。そして、県内有数の進学校のせいか、合理的なものを好む傾向にある。このような生徒の特性を把握しないままいくら練習をしても、うまくいくわけがない。これはどの学校でも言えることである。こういう練習メニューをすれば強くなるという方法などなく、子どもたちの特性を見極め、それぞれの子どもたちに応じた適切なアプローチをしていかなければうまくいかない。

初年度から現在に至るまで、新チームに移行した時には必ず行っているミーティングがある。部員全員に部活動に望んでいることを、本音ですべて吐き出させる。幼稚な発言・浅はかな発言など何でもとりあえず出させる。それらをホワイトボードに全て書いていく。ここで重要なのが、本音を言っても大丈夫だという雰囲気を作ることである。この時点で絶対に叱ってはならない。毎年出てくる本校の部員の本音の例が以下の通りである。

- ・「練習時間が長いのは嫌だ」
- ・「遊ぶ時間や勉強の時間を奪われたくない」
- ・「トレーニングやランニングはしたくない」
- ・「楽しくやりたい」
- ・「でも表彰されるレベルになりたい。勝ちたい」

わがまま極まりないと思われるかもしれない。しかし、大半の高校生がこのような感情を抱いているのではなかろうか。少なくとも私が高校生の時はこのような感情を抱いていた。大切なのがこの後のアプローチである。これらの本音をすべて叶えるための「具体的」な方法を考えていくことだ。部員自身が本気で望んでいることなので、彼らも真剣に考える。

まず「長くダラダラ」練習することはモチベーションの低下にもつながり、「楽しさ」も奪ってしまうので、チームとして徹底的に「質」を高め、できるだけ練習時間を短くすることを全体で共有した。人に押し付けられたものではなく、自分たちで決めたことなので彼らの決意も固い。では「質」を高めるとは具体的にどうい

とか？一般的な練習は「基礎練習⇒実践練習⇒ゲーム形式」という順ではないだろうか。「基礎練習」なしに上達することはまずありえない。重要な基礎練習でモチベーションが低いのは致命的である。しかし、大半の高校生は基礎練習が大事だと思っけていても、「つまらない」と感じ、モチベーションも低く、敬遠しがちではないだろうか。ゲーム形式をやりたがる部員が多いのは本校だけではなかろう。そこで、順番を変えてみた。最初にアップをした後、すぐゲーム形式(校内戦)をさせる。部活動時間が短い場合は「5-5 スタート」など条件を設定すればいい(本校は終盤に競り負ける子も多かったので、5-5 スタートはその対策にもなる)。「質」を高め、本番の試合と同じ雰囲気にするために、負けたらペナルティ(トレーニングなど)を課してもいい。そして試合後、すかさず何が問題であったかを考えさせる。多くが「チャンスで決められなかった」「ミスが早かった」などを挙げる。そして自分たちで「明日またゲーム形式で勝つために今から基礎練習をしなければ」ということに気づく。そして基礎練習に移行する。最初にゲーム形式をするだけで、基礎練習中の部員たちのモチベーションが顕著に向上した。「まず具体的に課題を痛感させる」ことが、基礎練習のモチベーションを高める方法である。基礎練習のモチベーションが高まった結果、当然チームの力が底上げされ、毎年本校の部員の多くが予選大会を突破し本選に進むようになった。2016年新人大会の予選大会では部員全員がシングルス・ダブルス共に予選を勝ち抜き、新人大会に出場するという快挙(?)を成し遂げた。底上げは上位の選手にとっても刺激になるのは言うまでもない。「うかうかしてられない」とさらにモチベーションを高めて練習に励む。そういう好循環が生まれた。

次に「トレーニングやランニングをしたくない」「必要性は感じるが、面倒だ」という本音にアプローチしてみる。この本音もまた、多くの学校の部員が思っていることではないだろうか。そこで先ほどの「質を高めて練習時間を短くする」とことと結びつけて、すべて練習に組み込んだ。わざわざ練習時間を割いて、ランニングをしに行ったり、トレーニングルームに行ったりすることをしなくていいようにした。具体的にどのような方法かというと、テニスの練習には玉拾い(ボールアップ)は欠かせない。この拾う時間が部活動時間をダラダラ長引かせている学校も少なくなかろう。そこでこのボールアップをトレーニング化した。全速力でボールを拾いきる。トレーニングにもなり一石二鳥である。部員たちもテニスの練習後にランニングやダッシュなどをする必要がないので、不満はない。こうして、石川県高校テニス界では有名(?)な附属高校男子の高速ボールアップができあがった。すべては部員たちの本音・願望を叶えるために生まれてきたものである。「強制」だとモチベーションは維持できない。そのほかにも、先ほどの「ゲーム形式(校内戦)のペナルティ」でトレーニングを採用している。トレーニングをしたくなければ、ゲーム形式で勝てばいい。勝つために基礎練習を頑張る。これも好循環を生み出す。当然、意識が高ければ、自らトレーニングの必要性を感じ、自主的に行う。こちらから強制する必要性は微塵も感じていない。

ところで「楽しい部活動の雰囲気」とはどんなものか。部員たちに聞いたところ、「ただダラダラしているのは楽しいとは感じない」とのことだった。しかし、「バリバリ黙々と練習するのも嫌だ」とのことだった。そこで2つの方法をとってみた。「休憩時間を全力で楽しむこと」と「練習中の声出し」である。まず「休憩時間を全力で楽しむ」。何を話してもいいので、とりあえず笑いが絶えないように休憩時間を過ごす。馬鹿話になる事が殆どだ。部活動の時間にどれだけ休憩時間をいれてもいい。たくさん入れれば入れるほど、練習時間が長くなり、自分たちの願望から離れていくことだけ分かっていけばいい。リフレッシュがモチベーションの維持に必要なということは言うまでもあるまい。そして笑顔でモチベーションが高いまま、再び練習に向かっていく。また「練習中の声出し」であるが、これを行っている学校は少なくない。しかし、何のためにしているか、その目的・効果を実感しながら行っている部員は少ないのではなかろうか。加えて「ナイスショット」など“画一的・均一的”な声出しに終始している学校も多かろう。「声は相手の心に届いてナンボ」と私は思う。「自分だったら何を言われたいか」「何を言われたらテンションが上がるか」考えながら声出しをしていく。人間の意志はそんなに固いものではない。「モチベーションの維持」などと言うのは簡単だが、行うのは難しい。そんな弱い自分を救ってくれるのが、周りだ。常に仲間の思いのこもった心からのメッセージ・叱咤激励が飛び交う。これが

「楽しい部活動の雰囲気」だと本校部員は考え、実践している。相手の心に届く声を出すには、相手の表情を普段からよく観察しておく必要がある。元気がない時、不調な時などすぐ気づき、適切な声出しができるのも、一緒に濃密な時間を過ごしているからであろう。

このように、すべては自分たちの本音・願望を吐き出したミーティングから始まっている。教員(顧問)がやり方を押し付ける方法では、好循環は生まれなかったであろう。

## (2) 周囲の変化

5年前に新人大会男子団体県3位に入賞しても、本校のスタイルは何ら変わりがなかった。「たまたま強い子が本校に入ってきただけだろう」と多くの本校職員が思っていた。その後の総体で男子団体3位に入り、北信越総体に出場しても変化はなかった。合宿や県外遠征を企画しても、管理職に許可されることはなかった。しかし、3年連続で新人大会・総体とも男子団体県3位に入賞し、3年連続北信越総体出場を勝ち取った時、変化が訪れた。「これはたまたま強い子が入ってきたからではない」ということをようやく本校職員が理解した。そして、部員たちの充実した表情を見て、本校職員のテニス部への見方が大きく変わった。合宿や県外遠征の許可もおり、学校に北信越総体出場の横断幕まで張っていただけのことになった。他の学校では当たり前のことが、当たり前でなかった本校にとって大きな変化である。最近、管理職が「部活動の活性化」を盛んに唱えるようになった。「継続は力なり」というが、充実した時間を部員たちが過ごすことを維持してきた結果、周囲の変化をもたらしたのだ。そんな周りにも支えられ、現在のチームは私が顧問に就任して以来初めて「団体でインターハイ出場」を目指している。例年、すべての部員が、中学生の頃無名、もしくはテニス未経験者のチームである。そんな部員たちが真面目にその目標に向かって、日々取り組んでいる。

また同好会(サークル)のような状態だった女子テニス部にも変化が訪れた。隣で充実した表情で活動をし、結果を残している男子テニス部を見て、男子と一緒に同じ練習がしたいと申し出てきた。2016年現在、男女テニス部という一つの部活動として切磋琢磨している。2016年、女子も団体で北信越総体に初めて出場した。男子テニス部の活動のいい影響が、本校の中でも出つつある。その影響は本校だけにとどまらない。他校から練習視察の依頼や、県を超えて練習試合の依頼をしていただけるようになった。これらも部員にとってはいい刺激になっている。弱小校であっても、充実した部活動が増えれば増えるほど、学校全体も活性化し、各種競技の上位校にとっても刺激になり、県全体の活性化につながるのではないだろうか。

## 3 今後の本校の課題

上記のように好循環を生み出してはいるが、課題は山積である。現状のやり方では県の上位までは常に食い込むことはできるが、全国出場まではたどり着けない。外部コーチの招へいや、県外遠征の増加などの対策が考えられるが、本校は部費を徴収していないため、金銭的な面で非常に苦しい。また、本校では一つの部活動につき、顧問が一人しかいない。ワークライフバランスを考えると、一人では限界がある。これは、「引率責任」など制度的な問題とも大きくかかわってくるので、昨今話題になっている学校現場における部活動の在り方の議論の推移に注目していく必要がある。

また、少しずつテニス部に対する本校職員の見方は変わってきているが、いまだ部活動と呼べるものは少ない。教員に部活動は教育の一環であるという認識が浸透していない。子どもの意識改革に比べ、大人の意識改革は非常に困難であることを痛感している。しかし、あきらめずに継続していきたい。

## 4 高体連について

昨年度の高体連研究大会にも参加させていただいたが、石川県全体で協力関係を作って「ボトムアップ」し、競技力を向上し、国体などで好成績をとというお話をたびたび耳にする。協力関係とはどのようにして作るべきであろうか。一部の県上位のチーム・選手ばかり優遇した場合、弱小校の生徒・教員たちは彼らを県代表として応

援したり協力したりしようという気持ちが沸いてくるだろうか。「ボトムアップ」に必要なのは、県上位のチーム・選手以外の人たちの本音や願望をくみ取っていくことではないだろうか。強いチーム・選手が傲慢な態度をとり、上から協力を依頼しては、「ボトムアップ」などできるはずがない。具体例を挙げてみる。数年前北信越総体テニス競技を石川県で開催するときに、高体連専門部で出場校以外の生徒に審判、顧問にコートレフェリーを依頼した。「多くの人出が必要なので協力してください」「出場校は試合に専念するので、出場できなかった学校がしてください」。これではなかなか協力者は集まらない。集まったとしても、嫌々集まっているのでモチベーションが低い。非協力的なのは長年、強いチーム・選手が優遇され、強くない選手・顧問に傲慢な態度をとってきたことが影響しているのではなかろうか。少なくとも私はそう感じる。それは特殊な状況ではなく、どの競技でも一般的に起こってきたであろう。強いチーム・選手など協力を依頼する側は常に「謙虚」でなければ、積極的な協力は得られるはずがない。この北信越総体の時には、本校が出場するにも関わらず、本校生徒(メンバー以外)が審判に入り、監督である私が審判長を務めた。私たちは試合だけに専念できなかった。出場するすべての生徒や、大会に関わる全てのスタッフ(審判を務める生徒たち)にとって価値のある経験をさせるためには、出場校以外の生徒や顧問に、積極的に協力していただき、モチベーション高く審判やコートレフェリーをしていただく以外に方法はない。そう考え、出場校だが、身を切る決断をした。本校生徒もいい大会にしたいという思いから納得し、出場できなかった生徒・顧問の方々の多くにも、モチベーション高く、審判・コートレフェリーをしていただけた。協力を得るには強いチーム・選手の普段からの「謙虚さ」と「身を切る」ということが欠かせない事を痛感した。石川県代表選手が、本当の意味でその他の石川県の選手に応援・協力してもらうためには、上位の学校、選手、高体連、各種競技団体(ジュニア協会)などがその姿勢を忘れてはならないと思う。

## 5 成績(団体のみ)

2016年 新人大会男子団体 3位(5年連続)

2016年 女子団体北信越総体出場(初)

2015年 新人大会男子団体 3位(県大会7大会連続)

2015年 男子団体北信越総体出場(3年連続)

2014年 新人大会男子団体 3位

2014年 男子団体北信越総体出場

2013年 新人大会男子団体 3位

2013年 男子団体北信越総体出場

2012年 新人大会男子団体 3位



## 「少林寺拳法の競技力向上に向けて」

少林寺拳法専門部  
金沢高等学校 岩野 将士

## 1 はじめに

少林寺拳法のルーツは今から 1500 年前、釈尊の正しい教えを伝えるためにインドより到来し、現在の中国河南省嵩山少林寺にとどまった菩提達磨によって中国に伝えられた拳技だといわれる。日本では 1947 年 10 月香川県多度津町で、宗道臣が中国の少林寺で学んだ拳技に創意工夫を加え整理・再編し、「正義感と勇気と慈悲心の強い人間」を一人でも多く育てることを目的として少林寺拳法と名付けて始まった。

以来、国内で数多くの若者が少林寺拳法の門をたたき普及が進んだだけでなく、国外にも広がり、1972 年にはアメリカ、ブラジル、インドネシア、マレーシア、スウェーデン、フィリピン、イラン、日本の 8 カ国で「国際少林寺拳法連盟」を発足し、1974 年には 16 カ国に増え、発展的に「少林寺拳法世界連合」へと移行した。

学校への普及に関しては、全国で初めて少林寺拳法部が 1950 年香川県多度津工業高校で創部された。1973 年全国少林寺拳法連盟が発足した。2009 年石川県高等学校体育連盟に加盟。2014 年からインターハイの正式種目となった。現在全国の高等学校で少林寺拳法に登録数している高校は現在 231 校に上り、部員数は男子 1810 人、女子 1331 人と 3000 人を超える。

## 2 競技とルールについて

## (1) 競技について

少林寺拳法の技は大きく分けて、突き、蹴り、打ち、切り、かわしなどの剛法と、守法、抜き、逆技などの柔法に分けられる。それらの技を組み合わせて構成する。競技は、大きく分けて単独演武、組演武、団体演武で実施している。各演武は 6 構成で構成され、資格に応じた技の使用が認められている。組演武に限りインターハイでは I 部、II 部で演武を行う。I 部は規定組演武では防具を着け、大会規則で決められたとおりの技と蹴りや突き、固めるときの手の位置の正確さ気合等の表現力を競う。II 部は自由組演武で、資格内の技を使用し、I 部と II 部の合計点で採点され順位が決定する。なお、資格以上の技を使用した場合、制限時間を超える、もしくは不足した場合総合点から減点される。

	人数	制限時間
単独演武	1 人	1 分から 1 分 15 秒
組演武	2 人	1 分 30 秒から 2 分
団体演武	6 人 (補欠 2 人まで追加可能)	1 分 30 秒から 2 分



単独演武



規定組演武

団体演武



自由組演武

## (2)採点基準

各構成技術点 60 点（各構成 10 点×6 構成）、表現点 40 点の合計 100 点で採点される、技術は攻撃、防御、反撃が正しくできているか、守り、抜き、固めなどがしっかりできているかを各構成で採点する。表現は技の構成、姿勢、構え、気合、気迫を採点する。審判 5 人制で採点する。

## 3 現状

県内の少林寺拳法部を有する高校は 8 校であるが、今まで 2 か月に一度県内の選手が集まり合同練習をしたり、県外の強豪校から講師を招き選手及び指導者の講習会を実施したりすることで県全体のレベルアップにつながった。また、高体連加盟を機に選手、指導者のモチベーションも上がりこれまで以上に積極的に練習に励むようになった。それらの結果は、全国選抜大会やインターハイでの成績にも表れ始めた。当初は、決勝に残ることもできなかった石川県勢だったが、今では決勝はもちろんのこと全国上位入賞まで手が届く選手も出てきた。特に、3 月の選抜大会は、階級別（4 級以下の部と 3 級以上の部に分かれる）で行われるため 5 種目で 6 組の選手が決勝進出を決めた。

来年度は、選手の更なるレベルアップと県全体の協力体制を強化し、石川県の選手代表としてベスト 3 を狙っていききたい。

## 4 まとめ

競技人口が少ないため、指導者が育ちにくい環境にある。少林寺拳法は年齢・体力に関係なく誰でもできる、という利点がある。未経験者でも練習を重ねれば指導者になれるので、指導者人口を増やしていく取り組みをしている。今年より、教員支部を石川県で発足し、月 1 度のペースで未経験者の顧問の先生に参加してもらい、練習を行う予定でいる。

他競技と比較して高校生の選手の数はい少ない。小学生の間は少林寺拳法を続けるが、中学生になると学校にある部活動に所属し少林寺拳法から離れていくことが多い。高校生になって経験者の部員確保は難しい。しかし、石川県少林寺拳法連盟のご協力、少林寺拳法のスポーツ少年団や町道場の熱心な指導もあり、徐々に経験者が高校入学後も続けるケースも増えてきた。今では小学生大会で全国最高得点をたたき出す選手も現れた。8 月に行われた全国中学生少林寺拳法大会でも石川県の代表選手が 1 年生ながら全国優勝を果たした。これからは、彼らも含めジュニア選手育成のため、高校のみならず、引き続き石川県少林寺拳法連盟の皆さまにもお願いし、環境づくりと育成に力を入れていかなければならない。



## ソフトボール競技の発展と競技力向上

ソフトボール専門部  
石川県立寺井高等学校 奥村 誠

### 1. はじめに（ソフトボールとは）

日本国内でのソフトボールの競技人口は2014年で約18万人（日本ソフトボール協会発表）とされており、他のスポーツと比較しても生涯スポーツとして愛好する者は多く、年齢層も幅広い。

ソフトボールは、冬季でも室内で行えるようにと、ベースボールのルールや用具に工夫を加え行われるようになったことを始まりとし、当時は“インドアベースボール”や“プレイグラウンドボール”と呼ばれていた。ベースボールと比較するとフィールドが狭く、塁間や投手プレートから本塁までの距離も短い。大きなボールと細いバットを使用する、投手は下から投げるというように、安全性への配慮から生まれた違いも見られる。この他にも、ピッチャーマウンドが無いこと、ピッチャーがボールを離すまで離塁をしてはならないことなど、ベースボールと異なる点が多くあり、戦術や技能にもソフトボール独特の特徴が見られる。

また、ソフトボールは、競技としてのソフトボールと、生涯スポーツとしてのソフトボールに分けられ、競技用はファストピッチ、生涯スポーツはスローピッチといい、後者はレクリエーション的要素が強い。高校までの競技においては、日本特有のルールとしてゴム製のボールを用いる（日本以外は革ボール3号のみ）。ソフトボールの普及、競技人口の増加を見据え、安全面やコスト面からもゴム製のボールが普及しやすいというメリットがある一方で、ゴムと革とでは必要な技能が異なるため、競技を大学・社会人まで続ける選手（特に投手）については、大きな課題となっている。

### 2. 取り組みまでの経過

本県の高体連登録(男女合わせて)のソフトボール部は、1990年代は24チームを保っていたが、徐々に減少し、2000年には16チームにまで激減した。その後10年間は12～14チームの状態が続き、ここ5年間は17チームとなっている。一方、中学校のソフトボール部の登録数は、能登方面での減少以外は変動がみられない状態で、大きくチーム数が減少したとはいえない。

“高校で競技を続ける選手の減少”という課題を目のあたりにし、その危機的状況をどのようにして乗り越えようかと試行錯誤を繰り返していた折、JSA（日本ソフトボール協会）はJOCの「GOLD PLAN」の策定に合わせて、競技力向上のための指導システムを構築しようと動き始めた。具体的には、一貫指導システム「競技者育成プログラム」、「NTS（ナショナルトレーニングシステム）」を実施し、選手の発掘・育成によりメダル獲得を目指した。それに伴い、石川県でも競技別一貫指導プログラムを作成したのを機に、中体連・高体連・ソフトボール協会が連携し、2006年（平成18年）に（女子部だけであるが）石川版「NTS」を立ち上げることとなった。

### 3. 具体的な取り組み

#### 一貫指導システム

小（リトル）・中（ジュニア）・高（シニア）への一貫した指導による競技力の向上、小学生をはじめとする競技者の拡大及び育成、中・高校生の県外大会に向けての強化・育成を目的とする。

(1) 小学生 (リトル)

①目的

ソフトボールに慣れ親しむ

②対象

県内の小学生 (リトルチームに所属している児童、未経験の児童 30~40数名)  
新聞などで募集をする。

③活動

月2回 (第1・3月曜日、金沢市専光寺ソフトボール場にて)

④内容

経験の有無や学年により、内容を変えて取り組む。ティーボール (ソフト素材) を用いた簡易ゲーム、守備・打撃練習など。



○小学生(リトル)の練習風景

(2) 中学生 (ジュニア)

①目的

競技力の向上、リーダーシップの育成

②対象

県内の中学生 (U-13~U-15各25名程度。選考会を実施。)  
※これとは別に、選抜チームを編成 (13名)

③活動

月2回 (第1・3土曜日、金沢市専光寺ソフトボール場にて)

④内容

基本的な技能・戦術を習得するための練習。選抜チームは、毎月の練習に加え、県内外に遠征し、交流試合や合宿を行っている。



○中学校（ジュニア）U-15

○中学生（ジュニア）  
選抜チーム選考会の風景



### （3）ジュニア・シニアの連携（高体連の取組み）

#### ①中・高交流試合

6月下旬～7月上旬にかけ、4日間交流試合の機会を設けた。3年生主体の中学生チームと総体後の高校生新チームとが、中学生のルールに合わせた形での交流試合や合同練習を行った。

#### ②NTS選抜チームの高校部活動体験

夏期休業を利用し、県総体優勝・準優勝チームの部活動を体験する機会を設けた。ここでも、交流試合や合同練習を行った。

## 4. 成果と課題

### （1）成果

#### ①「NTS」参加者の高校での競技継続率向上

初年度の参加者25名のうち24名が高校でもソフトボール部に入部し、競技を継続することとなった。高校のチーム数減少に歯止めをかけた一因と考えることができる。

#### ②リトルチーム数の増加

事業開始当初、県内のリトルチームは2チームであったが、最大で5チームにも増えた。中には、NTS研修会場に来ていた保護者同士の交流から生まれたチームもある。その結果、リトルでの経験を持つジュニア選手が増えた。

### ③成年チームの競技力向上

N T S 経験者が高校、大学で競技を続け、国体のふるさと選手として活躍している。平成23年には、N T S 2期生のメンバーが主力であった千葉国体で優勝を成し遂げた。また、その後教員に採用され、指導者として活躍している者も3名いる。

## (2) 課題

### ①指導者の育成

リトル経験者が中学校で競技を継続することが増えたことで、技能面でのより高い指導力が求められるようになった。また、経験者と未経験者との間にある技能面や精神面での壁を考慮したチーム運営、技能指導のみならずモラルやマナーといった人間形成を第一とする指導など、指導者に求められる課題は大きい。これらを適切に指導できる指導者の育成が急務である。

### ②リトル、ジュニアの交流

現時点では、リトル、ジュニアの交流の機会は設けることができていないが、継続率を高めるためにも今後は交流の機会を設けていきたい。これにより、各ステージの指導者が互いのチームの現状や課題を共有することもでき、上述したような技能面での指導、人間形成のための指導に一貫性を持たせることにも期待ができる。

### ③投手の育成

ソフトボール競技の勝敗の大部分を占める投手であるが、その育成が県全体として遅れている現状にある。今年度より、投手に特化した研修を行う予定である。そこでは選手育成のみならず、指導者の育成にも視点を置き、リトルからシニアまでの一貫した指導の在り方も検討していきたい。

### ④その他

先ほど成果の所でN T S がチーム数減少に歯止めをかけた一因であると述べたが、ここ数年低下の傾向にあり、今後の新たな対策が必要となる。

高校にチームが無いために競技継続を断念せざるを得ない選手が多くいる。特に、進学校と呼ばれる学校のチーム数が少ない。また、近年では、県外の高校へ進学し競技を継続する選手も出てきている。継続できる環境づくり、魅力のあるチームづくりにも尽力していきたい。

男子部では、女子以上に中学・高校とも活動している学校が少なく、今後は社会体育のクラブチームも考えていかなければならなくなっている。

## 5. まとめ

県内のソフトボールの現状は厳しい状況が続いていることは間違いないが、ソフトボールの普及・発展のため、協会・中体連・高体連がスクラムをがっちり組み、今の取り組みをさらに発展をさせ、ソフトボールの魅力を伝えていかなければならない、またソフトボール界では、オリンピックの正式種目から除外されていたが、2020年の東京オリンピックで復活したことで盛り上がりの機運も高まっていることをチャンスにしていきたい。

## 1. はじめに

現在、柔道は「JUDO」とも表記されオリンピックの正式種目として世界各国で親しまれている競技の一つである。また、日本発祥の唯一のオリンピック競技としても注目され、先般、開催されたリオデジャネイロオリンピックでも、男子73kg級の大野翔平選手、90kg級のベイカー茉秋選手、女子70kg級の田知本遥選手（富山県小杉高校出身）が金メダルを、本校OGの松本薫選手も57kg級でロンドンオリンピックの金メダルに続く2大会連続となる銅メダルを獲得するなど、男子が7階級全階級で、女子も5階級においてメダルを獲得する成果を挙げた。また、その後に開催されたリオデジャネイロパラリンピックでも複数のメダルを獲得した事は記憶に新しい。4年後に迫った2020年の東京オリンピック、パラリンピックにおいても活躍が期待される競技の一つである。しかし、柔道を取り巻く現状は厳しく、指導者による暴力行為やセクハラ行為問題、また、授業中や練習中の重篤な事故など解決すべき問題は山積している。特に、地方では、このようなマイナスイメージの定着による若年層の競技人口の減少は、さらに深刻な問題として、その解決が急務となっている。今回は、女子柔道の歴史と本県の現状から、本県の問題点を探り、今後の課題について述べたい。

## 2. 柔道の歴史と女子柔道

柔道の正式名称は「講道館柔道」と呼ばれ、明治15年（1882年）に嘉納治五郎師範によって創設された格闘技の一つである。その元は「天神真楊流」と「起倒流」という柔術で、その他の諸流派、さらには相撲やレスリングなど様々な格闘技を研究し、それぞれの良さを取り入れ、自らの創意と工夫を加え技術体系を確立したものである。その理論面を見ると柔術の「柔能剛制（柔よく剛を制す）」という柔の理から「心身の力を最も有効に活用する」原理へと発展させ、それを「精力善用」の標語で表し、柔道技術の一貫した原理とし、社会生活全般にも当てはまるとした。また、この原理を実生活に生かし、人々と社会の進歩と発展に貢献すること、つまり「自他共栄」を柔道の修行の目的とした。そして、柔道の修行は「術」を求めるのではなく、先述した原理と目的により自己完成を目指す「道」とし、「術」から「道」に改め、その「道」を「講ずる」ところという意味で「講道館柔道」と名づけられた。そうした考え方が広く欧米諸国に認められるようになり、現在では、国際柔道連盟に200カ国（平成25年・2013年現在）が加盟する競技となった。

しかし、嘉納師範は女性の試合を禁止しており、その修行も男性との性差を考慮し、その危険性を回避するため区別していた。ただ、海外では柔道より先に柔術が女性の護身術として普及していたため、日本より早くから試合も行われていた。そのため、女子柔道に関しては欧米を中心とした海外の方が日本より進んでいたのが現状で、実際、1980年（昭和55年）世界柔道選手権大会から女子も8階級で開催されるようになった。日本では、海外において大会が盛んに開催されている事を受ける形で、1978年（昭和53年）に第1回全日本女子選抜柔道体重別選手権大会が4階級で開催され、1984年（昭和59年）から無差別級を除く7階級での開催するようになった。また、1986年（昭和61年）には無差別級で争われる第1回皇后杯全日本女子柔道選手権大会も開催された。高校生の大会では、毎年3月に開催される全国高等学校柔道選手権大会において、1985年（昭和60年）第8回大会から女子個人戦が4階級で開催され、1987年（昭和62年）第10回大会から7階級で行われ、その後、様々な変遷を経て現在の形となっている。そして、毎年8月を中心に開催される全国高等学校総合体育大会（インターハイ）では、1990年（平成2年）第39回大会から女子

石川県中学校校体育大会柔道競技 女子出場推移

西暦	年号	団体参加校	40kg	44kg	48kgkg	52kg	57kg	63kg	70kg	+70kg	個人総数	備考	全国結果
2000	平成12年	11		9	13	13	13	9	5	2	64	7階級に変更	48kg苗加知江2位、57kg広村麻衣優勝
2001	平成13年										0	データなし	48kg松本明子優勝、57kg広村麻衣優勝、44kg松本薫3位
2002	平成14年	11		17	14	15	9	6	5	3	69		52kg松本薫優勝
2003	平成15年	11		20	17	14	9	7	4	6	77		
2004	平成16年	10		22	10	13	10	4	3	5	67		
2005	平成17年	12		21	16	10	8	5	1	3	64		52kg広村美樹3位
2006	平成18年	14		21	13	12	10	5	4	5	70		
2007	平成19年	18		28	18	19	12	5	5	6	93		
2008	平成20年	17		16	17	21	10	7	7	5	83	石川県開催	52kg宮川拓美優勝、57kg山田知佳3位
2009	平成21年	17		18	12	16	11	10	4	4	75		
2010	平成22年	19		17	18	23	19	8	4	7	96		
2011	平成23年	19		17	23	23	23	8	10	7	111		63kg渡辺瑞萌3位
2012	平成24年	15		17	23	19	17	7	5	5	93		
2013	平成25年	14	5	6	13	14	16	4	5	5	68	40kg導入(8階級)	
2014	平成26年	13	5	6	9	11	11	6	5	4	57		63kg田中こころ3位
2015	平成27年	10	11	8	8	7	5	6	3	3	51		
2016	平成28年	13	4	9	10	10	10	6	2	2	53		52kg山崎朱音3位

石川県高等学校総合体育大会柔道競技 女子出場推移 ※全国結果の( )内は選手権大会結果

西暦	年号	団体参加校	44kg	48kgkg	52kg	57kg	63kg	70kg	78kg	+78kg	個人総数	備考	全国結果(選手権大会含む)	
2000	平成12年	15	なし	9	20	18	19	6	5	6	83		(48kg染矢直美2位)	
2001	平成13年	12		8	20	12	16	7	6	3	72		金沢東高校(現金沢学院)団体3位 (63kg片野理由3位、70kg宇野世衣良3位)	
2002	平成14年	11		8	17	13	12	7	6	3	66	女子個人戦導入	(63kg正木理絵3位)	
2003	平成15年	10		10	9	13	10	6	3	3	54		(57kg広村麻衣2位、52kg松本明子3位)	
2004	平成16年	9		11	13	14	9	8	4	3	62		57kg広村麻衣2位、52kg松本明子3位	
2005	平成17年	7		6	11	10	12	3	4	2	48			
2006	平成18年	6		6	9	12	11	4	3	2	47			
2007	平成19年	9		4	9	12	7	7	0	0	39			
2008	平成20年												データなし	
2009	平成21年	12		10	13	11	11	6	2	4	57		(52kg宮川拓美優勝)	
2010	平成22年	11		16	10	12	12	3	5	3	60		52kg宮川拓美優勝	
2011	平成23年	9		13	11	14	8	6	3	1	56		52kg宮川拓美3位	
2012	平成24年	10		12	12	12	14	5	3	1	59		(70kg橋高朱里優勝)	
2013	平成25年	7		10	10	13	13	7	2	3	58		52kg米田愛理子3位	
2014	平成26年	9		9	12	10	13	7	2	4	57			
2015	平成27年	8		7	9	12	12	3	3	5	51			
2016	平成28年	8	4	9	11	11	3	2	4	44				

(1) 競技人口

表を見ても分かるように、中学校、高校ともにここ数年は減少傾向にあることが分かる。特に、高校は深刻で、平成12年度から減少し始め平成19年度には最も少ない39名の出場数となった。その後、平成20年度に開催された石川全中をきっかけに一次は回復したものの、再び、減少の一途を辿り、今年度の出場数は、平成19年度以来50名を下回る事になった。

中学校は、コンスタントに60名から80名弱を推移しており、石川全中に向けた強化が始まると同時に増加し始め開催前年度の平成19年度には93名となった。また、その後も増加傾向となり平成23年度には過去最高の111名となった。しかし、再び、減少傾向となり、ここ2、3年は50名台に落ち込んでいる。

(2) 全国大会の結果

中学校ではコンスタントに入賞者を輩出している。その数は12名で、その内、優勝者は5名になり二連覇を果たした選手もいる。その特徴として、一つに入賞者は全て小学校や小学校入学前からの経験者であること。次に、中学校に部活動がないため小学校時代からの出身道場で練習をしていたり、また、中学校で練習しながらも出身道場でも練習をしていたりと、継続して同じ指導者に見てもらっている事。この二つが挙げられる。

高校では、大きな全国大会が二つあり、全国高等学校総合体育大会(インターハイ)と全国高等学校

団体戦（3人制）が採用され、2004年（平成16年）第53回大会から個人戦（7階級）も行われるようになり現在に至っている。また、国民体育大会は、1991年（平成3年）に開催された石川国体から成年・少年ともに団体戦（3人制）が行われ、来年度の2017年（平成29年）からは成年と少年の混成チームの5人制となる。その他、全日本ジュニア柔道体重別選手権大会なども階級別の個人戦として開催されている。また、全国中学校柔道大会は、1991年（平成3年）から個人戦が4階級で開催され、1998年（平成10年）から団体戦も導入され、現在に至っている。詳細は下記の表を参考にしてもらいたい。どの大会においても男子の大会が先に開催されており、女子の大会は後から導入されている事が理解していただけると思う。

【日本で開催されている主な大会(高校生が出場可能)の変遷】

○皇后杯全日本女子柔道選手権大会(全日本柔道選手権大会)

西暦	年号	試合形式	階級						備考
1948	昭和23年	男子個人戦無差別級	無差別						第1回大会
1986	昭和61年	女子個人戦無差別級	無差別						女子の大会の開催

○国民体育大会

西暦	年号	試合形式	階級						備考	
1950	昭和25年	男子団体戦(5人制)							5回大会より正式種目	
1991	平成3年	女子団体戦(3人制)		52kg			70kg		無差別	石川国体より実施
2017	平成29年	女子団体戦(5人制)		52kg	57kg	63kg		78kg	無差別	

○全日本選抜体重別選手権大会

西暦	年号	試合形式	階級						備考	
1966	昭和41年	男子個人戦4階級	軽重量級		軽量級		中量級		重量級	第1回大会
1978	昭和53年	個人戦4階級		50kg	57kg	65kg	+65kg			女子の導入
1979	昭和54年	個人戦6階級	48kg	52kg	56kg	61kg	66kg	+66kg		
1984	昭和59年	個人戦7階級	48kg	52kg	56kg	61kg	66kg	72kg	+72kg	
1987	昭和62年	個人戦7階級	48kg	52kg	57kg	63kg	70kg	78kg	+78kg	ルール改正により変更

○全日本ジュニア柔道体重別選手権大会

西暦	年号	試合形式	階級						備考	
1970	昭和45年	男子個人戦3階級		65kg		75kg		+75kg		
1976	平成51年	男子個人戦7階級		48kg	52kg	56kg	+56kg			
1998	平成10年	個人戦7階級	48kg	52kg	57kg	63kg	70kg	78kg	+78kg	女子の導入
2010	平成22年	個人戦8階級	48kg	52kg	57kg	63kg	70kg	78kg	+78kg	44kgを追加し8階級

○全国高等学校総合体育大会(インターハイ)

西暦	年号	試合形式	階級						備考	
1963	昭和38年	男子団体戦(5人制)	無差別						男子団体戦のみ	
1990	平成2年	団体戦(3人制)	体重が重い選手から大将となる配列						女子団体戦のみ導入	
2004	平成16年	個人戦7階級	48kg	52kg	57kg	63kg	70kg	78kg	+78kg	女子個人戦の導入
2010	平成22年	団体戦(3人制)	体重の規制なし							

○全国高等学校柔道選手権大会

西暦	年号	試合形式	階級						備考	
1979	昭和54年	男子団体戦(5人制)	無差別						男子団体戦のみ	
1985	昭和60年	個人戦4階級		50kg	55kg	60kg	+60kg			女子個人戦の導入
1986	昭和61年	個人戦5階級	48kg	52kg	56kg	60kg	+60kg			
1987	昭和62年	個人戦7階級	48kg	52kg	56kg	61kg	66kg	72kg	+72kg	
1999	平成11年	個人戦7階級	48kg	52kg	57kg	63kg	70kg	78kg	+78kg	ルール改正により変更
2006	平成18年	団体戦(3人制)	先鋒=52kg 中堅=63kg 大将=無差別							男女団体戦のみ開催
2010	平成22年	団体戦(3人制)	従来通り							男女団体戦
		個人戦5階級		52kg	57kg	63kg	70kg		無差別	男女個人戦(5階級)

○全国中学校柔道大会

西暦	年号	試合形式	階級						備考	
1970	昭和45年	男子団体戦(5人制)	体重が重い選手から大将となる配列						男子団体戦のみ	
1991	平成3年	個人戦4階級		48kg	52kg	56kg	+56kg			女子個人戦のみ導入
1998	平成10年	団体戦(3人制)	体重が重い選手から大将となる配列						女子団体戦の導入	
2000	平成12年	個人戦7階級		44kg	48kg	52kg	57kg	63kg	70kg	+70kg
2013	平成25年	個人戦8階級	40kg	44kg	48kg	52kg	57kg	63kg	70kg	+70kg

3. 石川県女子選手の競技人口の推移と結果について

下の表は、県内の中学校と高校の女子の参加人数の推移についてまとめた。

※記録は個人戦において現在の階級となってからの人数となっている。

柔道選手権大会（選手権大会）である。中学校との対比を考え、インターハイの結果から見てみると、中学校と比較すると入賞者は減っていると言える。入賞者は4名で優勝者となると1名である。しかし、選手権大会を含めると同じような数になり、入賞者は8名で、その内、優勝者は3名になり二連覇を果たした選手もいる。また、中学校と高校を通じて入賞を果たした選手は4名で、その中で中学校と高校を通じて優勝を果たした選手は2名となる。その一人が、松本薫選手で高校での優勝は東京都の高校時代のもので、本県では全日本ジュニア柔道体重別選手権大会で優勝している。

また、入賞した選手は中学校同様に少年の頃から柔道を経験しており、中学時代でも全国大会を経験している選手であった。

団体戦においては、中学校と高校を通じて優勝したチームはなく、3位入賞が最高の記録となっており、チームで勝利することの難しさを物語っている。

#### 4. 本県専門部の取り組み

##### (1) 合同練習の実施

専門部としての強化合宿及び合同練習は、年間で3回（6月、8月、9月）実施している。特に今年度からは、9月のシルバーウィークの連休を利用し中高合同練習会を実施した。この練習会は、元々、国体の女子の強化練習として昨年度から実施してもので、昨年度は女子のいる中学校の顧問に連絡を取り開催し好評だった。そこで、今年度は中体連柔道部と連携し専門部から正式に要項を発送した。すると、昨年以上に参加校が増え、特に、専門の指導者がいない中学校の参加が目立った。そうした中学校の顧問の方が絶好の練習する機会と捉え参加してくれた事は大きな収穫だった。

また、今年度については、中高合同の練習会ということで、東京からも練習に参加した学校もあり、今後は9月だけでなく、中体連と連携し定期的に継続していきたいと考えている。

本校としては、4月や5月の連休中、7月や8月の夏期休業中、3月の休業中に大学生との練習を目的に県外から合宿に訪れる高校が多く、その中で競技力の向上が図られている。

①6月：於＝小松市桜木体育館、男子強化と合同で開催。男女とも県外から強豪校や国体チームを招待して実施。

②8月：於＝石川県立武道館、女子単独で開催。本国体の出場を目的として実施。県外からも複数校が参加。

③9月：於＝石川県立武道館、中体連柔道専門部と協力し「中高合同練習会」を実施。県外からも中高一貫校が参加。

##### (2) 県外遠征の実施

専門部としての県外遠征は、年間に1回、2月に滋賀県の錬成大会に参加している。錬成大会では数十校が集まり、リーグ戦を組み試合練習を行い実戦的な練習を行っている。

各校でも、5月のGW期間中に富山県小杉で開催されている錬成大会、7月に福岡県で開催される金鷲旗大会終了後に熊本で開催される錬成大会、8月に新潟県、10月に岐阜県、12月に奈良県など、遠征を実施し、県全体の競技力向上につながっている。

#### 5. 本県の問題点と課題

##### (1) 競技人口の減少

###### ①少子化による子供の数の減少

この問題は、柔道だけでなくどの競技においても解決すべき課題だが、すぐに解決できる問題でもなく、長期的に対処する必要がある。

###### ②初段（黒帯）の取得が目標



特に中学校から始めた生徒の中に見られる傾向で、初段（黒帯）を取得する事が一つの大きな目標設定となっているため、取得することで目標を達成したという充実感を得て、高校進学後に柔道を継続する意欲が持てなくなっている。

### ③勝利至上主義的な発想

中学進学後や高校進学後も柔道を続ける生徒の大半は、試合において「勝つ事の喜び」を知った生徒中心となる。それは自体は素晴らしい事だが、「勝つ事の喜び」を知らない生徒の大半は、進学をきっかけに違う競技に移行するケースが多い。柔道の修行目的は「自己の完成」にあるという点を、どのように生徒に伝えていくが課題となる。

### ④部活動の加入率の変化

本校の運動部活動への加入率は、平成26年度が37.7%、平成27年度が40.05%、平成28年度が40.73%でここ3年間は微増傾向にある。一時期は、部活動への加入率が減少傾向にあると言われていた時期もあったが、全国的にも微増傾向にあるようだ。ただ、女子の柔道部員に関しては減少傾向にある。その要因として考えられるのは、階級制によって体重が明記されるため体重が分かる、体型が筋肉質になりやすいなどが考えられる。また、保護者の観点から考えた場合、柔道指導者による暴力行為やセクハラ問題、また、練習中や授業中の怪我などの報道なども競技をさせたくない理由になると考えられる。

## (2) 指導者の不足

### ①引率顧問の増加

中学校、高校ともに柔道の指導者資格を取得している教諭が不足傾向にある。今年度、石川県高体連柔道専門部に所属する顧問は総勢40名になるが、その中で柔道の指導者資格を取得している専門の顧問は21名と約半数になり、大半は引率顧問となる。また、中学校では顧問の数は61名、その内、専門の顧問は13名で、大半の中学校では指導者資格を持っている外部指導者が、コーチ登録を行い指導に当たり、大会でも引率顧問とともにコーチ席に入っている。

## (3) 女子選手の成長期と階級変更

### ①階級へのこだわりと健康問題

成長期にある中高生にとって、体重コントロール（減量）は大きな問題である。過度の体重コントロールは成長期の身体への負担は大きなものである。特に女子選手の場合は深刻で、内性器の成長期と重なる時期に過度の体重コントロールを繰り返す事で、月経不順となるケースが多く見られる。また、過去には、高校時代の選手として試合に出場している期間、無月経だったケースなどホルモンバランスを大きく崩すなどの多くの弊害が認められる。特に一つの階級で勝った場合に階級移動に対する不安は大きいようで、過度な体重コントロールする事で体調を崩し、精神的に不安定となったりする選手も見られる。

## (4) 今後の課題

### ①中高合同練習の活性化

先日した本県の取り組みでも紹介したように、中体連と高体連が協力し、合同の練習会を開催し好評を得た。お互いに専門の指導者が減少している中で、これまでも各大会においては審判の派遣などは協力し大会を運営してきたが、合同練習については初めての企画となった。

中学校での好成績は、少年時代からの一貫指導が大きく関係していると考えられる。そこで、今後、今回のような機会を積極的に実施し、中学校で活躍した選手については、中高の指導者が一貫した指導方針を共通理解として持つことで更なる強化を図る事が大切となってくる。また、中学校から

柔道を始めた生徒や、望むような結果を残す事が出来なかった生徒へもスポットを当て、進学後も柔道を継続する大切さを伝えていきたい。

## ②武道必修化の利用

指導要領の改正に伴い、中学校及び高校の保健体育では武道が必修化となり、県内の中学校では武道の授業として柔道を実施するケースが多くなり、生徒は今まで以上に柔道に接する機会が増えた。この機会をチャンスと捉え、柔道の競技性からくる楽しさだけでなく、修行目的の「自己の完成」を如何に伝えていくかが課題となるだろう。特に、男女共修で行われる場合は、女子生徒に対してどのように柔道に取り組みせるかが大切になる。

今、少年の柔道大会などを見ると応援席から家族の応援や声援が多く聞かれる。特に母親の声援が試合上に響くことが多い。つまり、母親となる女子生徒が如何に柔道に理解を示すかが柔道競技の人口増加の鍵となると言えるだろう。

## ③柔道「MIND」の徹底

全日本柔道連盟も度重なる指導者側の問題から、指導者資格の取得を徹底しており、指導者の質の向上を目指している。特に「MIND」を提唱し、嘉納師範の柔道の修行目的を目指す原点回帰とも言えるスローガンを掲げ、柔道に携わる者全てに訴えかけている。

その言葉が **Manners** (礼節) **Independence** (自立) **Nobility** (高潔) **Dignity** (品格) という4つの言葉の頭文字を繋げたものである。その「MIND」の個別のテーマについては、次のようになる。

- ・礼節：柔道は礼に始まり礼に終わる。敗者を思いやる心が真の勝者を育てる。
- ・自立：指導者にコントロールされ過ぎない選手になる事。最終的には一人で考え成長する事が大切だ。
- ・高潔：誇り、プライド。
- ・品格：人間としての格を高める。勝利至上主義ではダメ。

このスローガンは、中体連、高体連の大会でも訴えており、かなり、浸透してきている。こうした取り組みを粘り強く行うことで、広く柔道の素晴らしさを伝えていくこととなり、競技人口の増加にもつながるものと考え。また、そうした活動が強いては競技力の向上にもつながるものと信じて、日々の練習に取り組んでいきたい。

第10回県研究大会参加者名簿

	学校名	氏名				
1	大聖寺実	西田京美				
2	加賀聖城	木村強				
3	大聖寺	油谷憲治				
4	加賀	林文夫				
5	小松商業	田村智成	山作直弘			
6	小松工業	元尾武彦	中谷昌和	岸一盛	菊田克己	
7	小松市立	浅田崇一	山本伸忠			
8	小松	安田誠二	塩屋千学	安田誠二	中嶋茂樹	
9	小松北	豊田浩				
10	小松明峰	高澤隆介	高田哲洋	高澤隆介		
11	寺井	達光洋	奥村誠			
12	鶴来	山田純文	櫻井外郷			
13	松任	大日向茂樹	西垣仁志	片岡信忠		
14	翠星	澤入佳代	谷本佳代			
15	野々市明倫	大倉香奈子	勝見文雅	山田進		
16	金沢錦丘	油野知加	角橋茂則			
17	金沢泉丘	宮西良岳	青木崇			
18	金沢二水	中村建哉	荒川富夫			
19	金沢中央	北中弘規	中川太			
20	金沢伏見	今川徹				
21	金沢辰巳丘	千石友規	田村達			
22	金沢商業	金城美咲	中町和弘	山田齊		
23	県立工業	島屋豊	中村三成			
24	金沢桜丘	川端孝博	小田哲生	寺西了	釜田涉	
25	金沢市工業	水内浩	増田英樹			
26	金沢西	野尻直人	東勝彦			
27	金沢北陵	波佐間英之	川井孝人	後川徳人		
28	金沢向陽	山首一恵	中川義之	車浩明		
29	内灘	守屋英樹				
30	津幡	勝二国博	中村篤			
31	宝達	稲田秀幸				
32	羽咋	水野清正	中越早代			
33	羽咋松	藏野紀夫				
34	羽咋工業	井村和彦				
35	志賀	宮本裕之				
36	鹿西	今藤謙二				
37	七尾東雲	倉脇寛支				
38	七尾尾	向田圭吾				
39	七尾城北	白藤金一				
40	田鶴浜	山岸亜矢				
41	穴水	室谷貴大				
42	門前	新出廣				
43	輪島	赤穂真				
44	能登	小杉央子				
45	飯田	岡田英典				
46	ろう学校	木下郁子				
47	明和特支	小林真				
48	いしかわ特支	洞庭瑞希				
49	金大付属	山本潤平	前田建志			
50	小松大谷	岡部さと志	人見雅樹			
51	北陸学院	新田町幸子	宮田佳恵			
52	遊学館	中田浩文				
53	金沢	波佐間美樹	日吉正	岩野将士		
54	尾山台	岡田麻紀子				
55	星稜	風間亮人	櫻井亮士	米田光利		
56	金沢学院	金子順也	西村裕樹			
57	鵬学園	藤井繁				
58	日本航空	田辺和文	南健介			